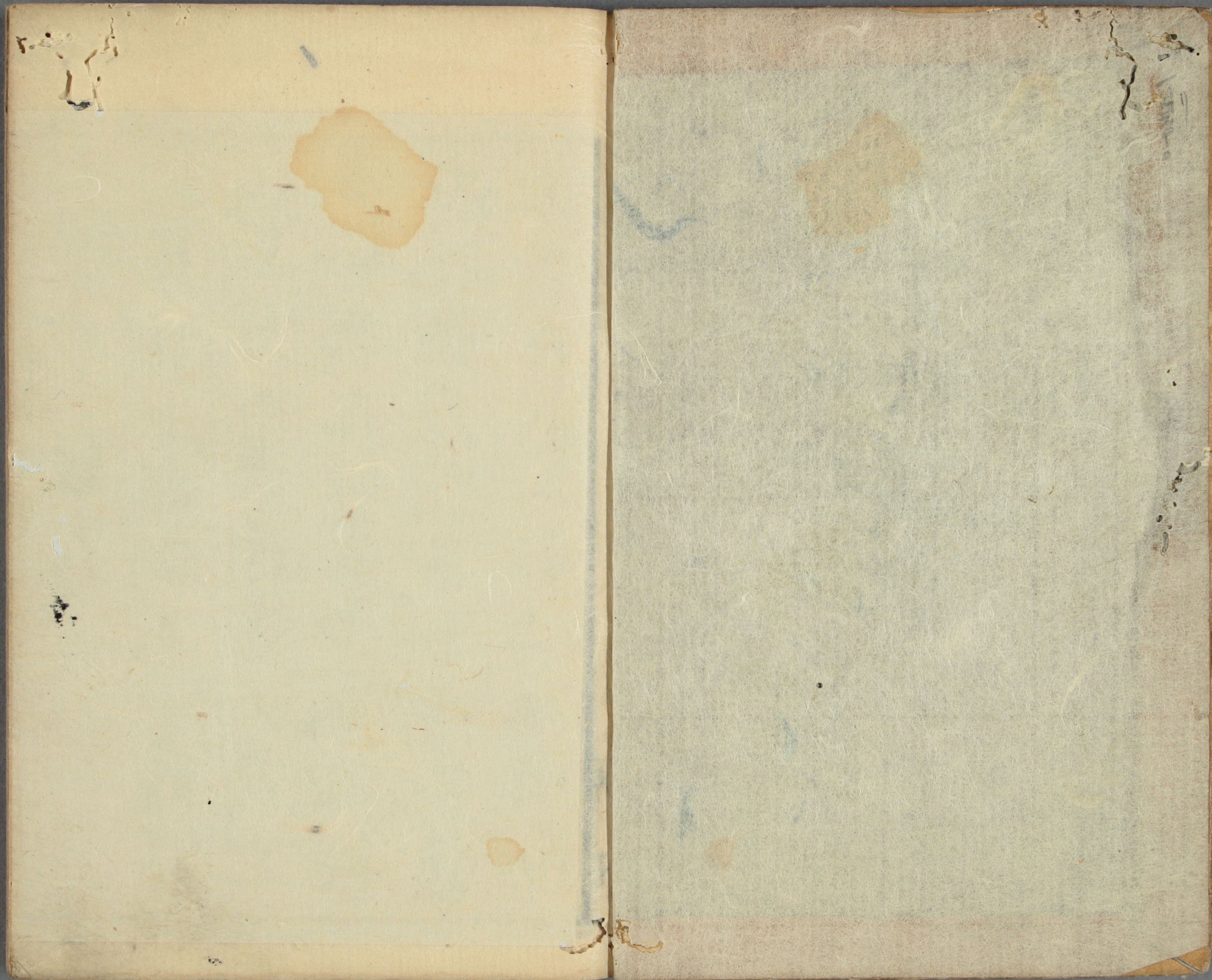


七部大鏡

序





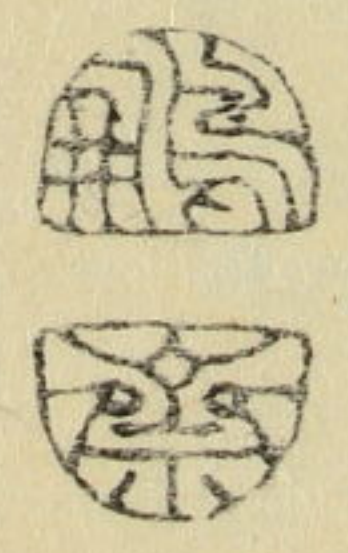
七部集六鑑序

芭蕉翁七部集。其言脫塵
凡其句二高尚。後人為之
注釋者。凡四十七家。彼此
出入。精麁相半。未得其髓
矣。翁居則一瓢之米自漸

之。出則一挑之袂。親搭之。
嘯月嘲風。無所住着。所謂
幽人之貞者歟。宜矣。淺近
凡俗之士。不能究其意也。
科野何丸。學公羽之正風者
也。冀思研精。七年於茲。博

搜故事。遍檢古書。為之集
解。名曰七部大鑑。其意蓋
在於懸明鏡以照四十七
家之妍媸云。文化六年己巳
秋九月。書于科野吉田行次

江戸 鵬齋老人識



以
後
之
事
也
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

あなよ 安しき 相見えぬ
日暮きこし 傍を立替ふ
かゝるに 女抱ひた 病中
あふふし 不佞あつて 子
目も 控ふる 病を 時も
等 血 涙 心 肝 聖文 綴り

序 止

欠 一 中 へ 手 候 へ 候
難 斗 へ 大 あ ず の 及 此 行
は へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ
と 存 する せ へ へ へ へ へ へ へ
田 舎 へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ
へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ へ

アノ下

十月 十三日 亥之辰

何丸様

二白のい子糖は朱美のさへ
お送りし

セシおきまぬ物つ家のちかきる 鶴嶋
のちかきるあかきち貝とお甘いの朱
龍乃首糖をさの得るさきい
— きるさいぬきもの何丸さん
あき— ちかきるをつらきい七部
朱の解るぬこも母をかうへ

たゞ一大幅とてあるまゝにさ
あまらうにきよめ一助なりを母
此集のなる文を先は言未多
のみまゝにいふおやうに老母れ
のまゝにいふおやうに床のまゝに
かた一とていふおやうに
おやうにいふ

あとも二三冊とていふおやうに
しるあまのまゝに
は書きまゝに
かゝ一集とていふおやうに
入るの果をまゆるおやうに
もあまのまゝに

おき難きもいふも——也

文はよふ年秋日 雲中雁野に



人麻呂もさうたを電とあめふしの
たをせめぬあつたのひをちを頼とらんそ
あつたあつたあつたあつたあつたあ
の月夜にあつたあつたあつたあつたあ
人々あつたあつたあつたあつたあつたあ
ひとの風の音をあげていふあつたあつたあ

せえらやむ教ありて形も川生にちし會
はらけしひらの聖といふれをね下せ
まのこしあかしく一書か百年の後よ
ありといふれあかしくよかゆりてを
もあひのふらあかしくよの信野の何れ
阿たよ是の海流をいして七部大續と
いふて撰むとい一家の言うしてあかしく

五
そとえ風の物とをさかむくにしきくをさる大
まひあてしすてを道法印印よあせれお
ちひよりあかしくいへるあかしくいへるあ
但七書ののり続らるれをさかむくいあ
まの信野の海流をさかむくいあかしく
あかしくいへるあかしくいへるあかしく
あかしくいへるあかしくいへるあかしく

あまのついでにみづのついでにほかにしるはるに
たふさるのついでに多田の森乃れくに
まてぬれとあしたの事をもついでにわき
たふさるのついでにほかにしるはるに
みづのついでにみづのついでに
随奇寒灯のもとに筆を採

國書

ほかにしるはるに
たふさるのついでに
まてぬれとあしたの事をもついでに
みづのついでにみづのついでに
随奇寒灯のもとに筆を採

あゝ六歌よのかたりのまぢも下を
くちをまゝしつゝあつちをよめ
みよのまゝしつゝあつちをよめ
何しつゝあつちをよめしつゝあつちを
秘中をよめしつゝあつちをよめ
しつゝあつちをよめしつゝあつちを
佛諸のまゝしつゝあつちをよめしつゝあつちを

はまのまゝしつゝあつちをよめしつゝあつちを
定のまゝしつゝあつちをよめしつゝあつちを
れつちのまゝしつゝあつちをよめしつゝあつちを
土のまゝしつゝあつちをよめしつゝあつちを
月のまゝしつゝあつちをよめしつゝあつちを
長のまゝしつゝあつちをよめしつゝあつちを
中びしつゝあつちをよめしつゝあつちを

何れおちたをいかに
おのゝちめおの
まのきま本了れは
辞こうせしやうい

十四

言はひらうせしやうい
深切和らうせしやうい
まのよき
考くはる色

文化元年八月

舟楫博士朗

三葉集蕉雨亭

柳の家々の天竺小

こひ糸をさしひ出さるる

見えしあの本かみ様

柳のむしりまじし

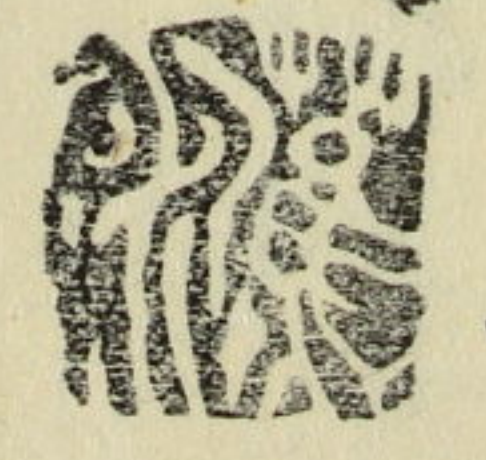
活りてあらしめ
よといよとありし
都吉原 駈うもし
おくまのやうに
お

又とわくがふれ
十のりやむし
一年とらふ法
経了かふあし

大樹とてありみえ

文政二年

八集集馬雨



田代三郎

筆道品のゆく終へ 暮らまや代は
と上の方の風土うあはすこほり
くぬらうの流るる雨とて上の方
ハ一なるもおひきかたかひさし
をこころもこころの吹ひらくぬき
ハ十部中の一書を印するもあら

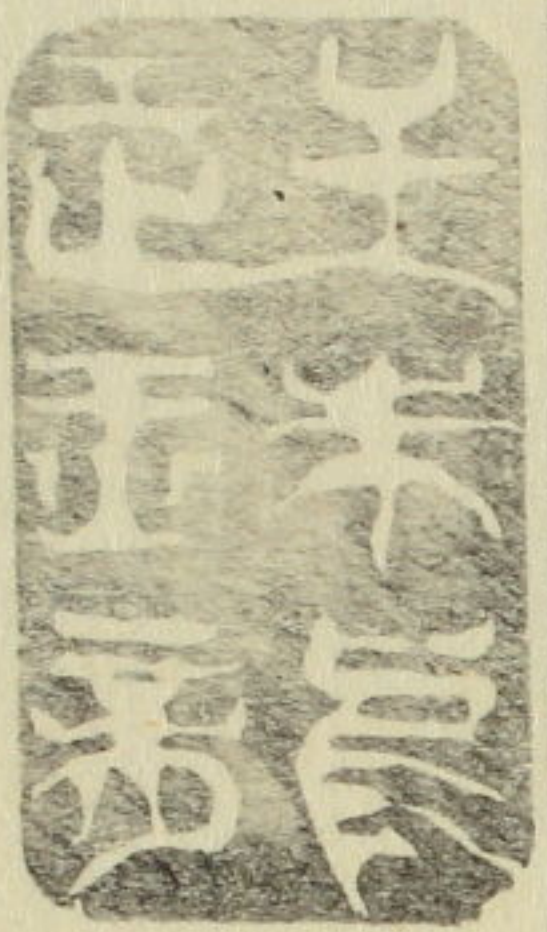
文化丁丑冬

字安

月居

歳

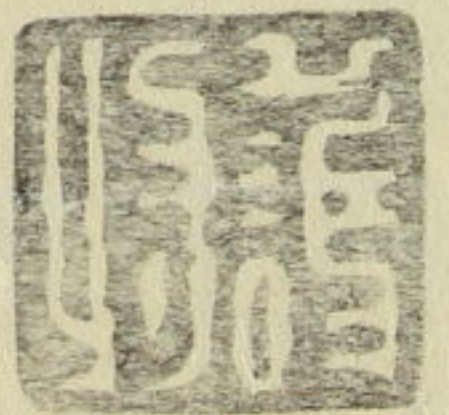
之役而... 魏... 韓河... 太宰... 邦...



四規とくは鏡をもてしるす
 てもなるおのまじくたがふまじく
 なるゆゑに神心もつらき見
 千里のあはれも見えしるす
 しるすかかおしるすはの
 大正西の中そとにありしるす

かの玉の山にらのめのもる年を
初まししは後にはまらひめまき
をかくよの神よりけえくし
すさるるもとたふにはあり
くはるるは者何れかせん
あさしり

そのまき 翠の鳥護物



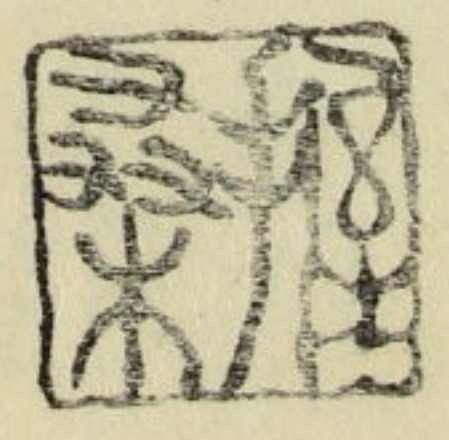
信の何のふもふ
なごうを交深き
尾淵のめしと字
わて我病蘇のふて

ふしの叙るさしよら
陣の詩多々序師あり
今えい何をおい大せ
はくしゆら容貌半
觀尔二年七の敷音声

其の物文蕉翁の七部
のあしよらいしよら
上木の集註け及の
金園とから大人世の人
の感なるしよら馬

備忘の功より
るんとしるるる
冠の書るるるる

北律雪成北元



上序三十一

日 浦子園
石 鏡
五 織
在 織
東 織

心念のしる末後

心念のしる末後

心念のしる末後

心念のしる末後

心念のしる末後

心念のしる末後

心念のしる末後

心念のしる末後

心念のしる末後

心念のしる末後

心念のしる末後

心念のしる末後

心念のしる末後

心念のしる末後

心念のしる末後

心念のしる末後

心念のしる末後

心念のしる末後

心念のしる末後

心念のしる末後

昔より書籍の海狗は生酒を
玉も能く少加へ民中にも向秀の莊子
季の吟う源氏其功の古く吟うさう季
友何丸は八世に在ぬ能く七歌の能
能修高半里を能得るこすを歎き二十
年耳此一節の魂を能く和漢の可

世に七部集とて名はら既
しはははを其かくみかや
る程を説くも其四十餘篇
阿含の事と名ふる難しとて
をいふれい後百何九と云

かろりて其れかを其たは
む稱を傳ふり其やまを
やのし一書海古をいはたき
初をこたふるを其たすらに
あから志あむとちるる

此は北より南へ
 了らば南より北へ
 美を著す世に也
 美を著す世のあり

増檢校保已一

水母散人識

正万書

序四十二

凡例

- 一 古注と記すの祖前直弟の論より其故凡十五篇
- 一 書と記すは宝曆年中より文政乃今日之ちや々の注より其故を不よそ三十五篇
- 一 誰曰と記すは其人の對談——或は文通ホとしてきことえらるるを其故也
- 一 説と記すは世上之流布する知を其見聞の終り也

一 同注ハ先注をあけ又世評と愚考と
同意多クハ世同ハあつりて誰曰と記す
是世同の勢尊と奪ハするの志を
ふりて人々ハ論中ニ明々
あり

一 先注とつへともよるハかゝぬハ悉く
秘破せり其餘の説も右ニ准す
その確執をとりしる事なり

一 此等の俳諧が見るに外如
るも物見及ぶそのうち至てまじ
りた序よき如く書くつてその僞言

純明寸故いふことつたに誰るもか
あや誰る誰合とけ格ありきり世
の俳諧を本とする人もたつたハ
道の大なるなるなりとて其事
を得ずあ杖の妙法なりと見む人
偏執の心をやめ御道の心なり
つき遠くハ連歌の祖神也ハ
枕書異神の本意を失ふてなり

月院社

何九述

附言

大鏡成ては諸家の談論及び其中
得る知のほ書の多しと巨多の説あり
是とて七部ハ後と題一ハ卷を著す
程宗くく考へる高論のあり
けのやふらるる蔵書とあり
惠みありとそその義談を記し
永く不朽の跡をたしめて
本願あり四寸の君子すみわく大鏡の
くくるとまじひありけみ給へ

引用書目

法華經	法苑珠林	悲華經	報恩經	十王經
孟蘭盆經	傳灯錄	梵網經	文殊經	般若經
高僧傳	因杲經	知度論	明心法鑑	諸乘法數
千手經	僧史略	遺教經	涅槃經	禪林類聚
史記	前後漢書	晉書	南史	宋書
唐書	宋史	通鑑紀事	素書	廣雅
六韜	易經	書經	詩經	禮記
春秋元命通	史記正義	易候	五經通義	
詩經正義	曲禮	周禮全經	論語	孟子
列子	莊子	抱朴子	淮南子	五雜俎
酉陽雜俎	五車韻瑞	白虎通	琴操	荀子
風俗通	羯鞞錄	孔子家語	太平廣記	魏豹傳
				晉子
				爾雅
				九傳
				戰國策

典籍并覽 太平濟覽 荆楚歲時記 事物紀原
車林廣記 車文類聚 類書纂要 漢武故事
前漢外戚傳 漢武內傳 車文後集 樂書
翰墨全書 書言故事 寶典 雜五行書
漢事始 杜氏通典 陳藏器 對類大全 唐令
弁樂解 孫盛雜記 綿繡萬花谷 裘服小記
冷齋夜話 續齋諧記 爰溪筆談 風土記
焦氏筆乘 容齋隨筆 軒轅本記 春明退朝錄
太一金鏡經 祖庭事苑 三秦記 四部稿選
黃帝內傳 韓文 柳文 潛確類書 占書
十節記 尋到源頭 玉燭寶典 塩秩論 幽吟錄
唐韻 温公詩話 瑯琊代醉 拾遺記 教坊記
歸田錄 擊蒙要略 帝城景物略 古今原始
通曆 義楚六帖 學齋佔畢 出曜經 名義集

繫辭 通鑑齋記 寒山詩集 山海經 通典
樂府雜錄 遊仙窟 呂類事實 新論 論衡
太白陰經 魏略 楚辭 皇圖要記 蜀王本記
帝王世記 墨子 桓子新論 玄中記 古史考
物理論 三禮圖 大戴禮 古今注 海錄碎事
毛詩 仙傳拾遺 管子 世風記 月令廣義
歲華紀曆 古樂府 漢雜事 講德論 通論
漢武策 毛詩傳義 涉世錄 玄妙內篇
諸子娘孃 東觀漢記 秦書 顏子家訓
笑苑類彙 通載 格物記 困元遺事 西京雜記
晉朝雜記 南越志 統晉陽秋 輟耕錄 洞冥記
退耕錄 說苑 孫氏世錄 異苑 世說新語補
養生論 蒙求 成語考 蠡海集 統世說
格物叢話 陸佃埤雅 鶴林玉露 要言故事

聯珠詩格 小說 搜神記 神異經 錢神論
 小學 神龜論 質龜論 器錄 劉向五行傳
 相鶴經 茶筴獨斷 仇池墨記 集林大斗記
 大明一統志 華陽風俗記 禽經 獸經 博物志
 運斗樞 天文志 韻府 麗居士治錄 韻會
 說文 句略 圓棧活法 三才圖會 造化論
 神仙傳 高士傳 隱逸傳 列仙傳 才士傳
 文選 古文 朝詩外傳 本草小品方 病源論
 三體詩 錦繡段 杜律 白氏文集 李白詩集
 山谷詩集 東坡詩集 朱子治錄 詩經齋風
 名物弁解 沈存中華談 溫故日錄 四六文章
 東齋隨筆 江湖風月集 石林詩話 詩人玉屑
 萃巖經 僧祇律 金剛經 德義經 朝野群載
 舊事紀 文德實錄 故事紀 日本紀 類聚國史

神皇正統記 本朝通鑑 諸社根元記 日本史
 藤原系圖 和漢朗詠集 延喜式 統日本紀
 本朝遼史 本朝列仙傳 職原抄 倭姬世記 人史
 技朮搜神記 日本後紀 清輔輿義抄 職員令
 神社考 菅家御集 清輔雜談集 和歌色紫抄
 元亨御書 中右記 名月抄 教氏要覽 家禮
 万葉集 資道什物記 本朝月令 新撰万葉
 古今集 八雲御抄 後拾遺集 統古今集 江記
 後撰集 新古今集 統拾遺集 新勅撰集
 新後撰集 金紫集 統後撰集 千載集 詞苑集
 統子載集 統後拾遺集 新後拾遺集 玉葉集
 風雅集 新統古今集 拾玉集 小町家集 賴政家集
 山家集 西行家集 俊賴家集 夫木集 伊勢家集
 信明家集 名寄集 堀川百首 堀川後百首

學白集 藤川百首 新明題集 六百番歌合
 曾我物語 十寸淺 埃囊抄 古今榮雅抄
 久安百首 正風傳抄 悅目抄 和名抄 六帖
 仙覺万葉抄 古依日記 清輔袋草紙 竹取物語
 源氏物語 伊勢物語 落穴窪物語 大和物語
 榮花物語 世施物語 統世繼物語 任古物語
 平家物語 今昔物語 狂雲集 十六夜日記
 梁塵愚抄 耳底記 宇治拾遺 長明發心集
 撰集抄 徒然草 江家次第 長明道之記
 無名抄 公事根元 長明方丈記 年中行事
 長明海道記 春乃曙 河海抄 長明伊勢之記
 新撰髓腦 花鳥余情 拾芥抄 源平盛衰記
 清少納言 井蛙抄 江源武鑑 日本灵異記
 文献通考 根本律 要言故事 微書記物語

篇中抄 文章軌軌 春雨抄 遠嶋御百首
 歌道鈔物 曉華抄 扶桑略記 本朝列女傳
 羅山集 天文雜記 北條五代記 和漢合運
 善隣國宝記 草山集 下學集 長明文字錄
 圖繪宝鑑 古事談 公卿補任 古今著聞集
 懷風藻 統古事談 一円雜談集 大成經
 本朝年鑑 和漢三才圖會 十洲抄 東西夜話
 千五百番歌合 隱逸傳 統隱逸傳 民家宣忌錄
 太平記 旧遺考錄 女郎花物語 源治秘決
 枕花甚多 江談抄 本朝醫考 日本歌名
 禁秘抄 贈餘雜錄 雲谷雜詠 霞巖集
 行狀記 南浦文集 和歌八重垣 要筆傳 海人藻芥
 掌中曆 大和本草 高名錄 武用弁略 兵具廻談
 萱之記 言塵抄 醒眠記 東鑑 兼燭譚 歌枕

全浙兵制 新田軍記 卷懷食鏡 隨園記 一休咄
 後太平記 名物六帖 素堂家集 竹齋物語 大鏡
 大原千句 藻庭孝 武備志 古刀銘鑑 和事始 畫史
 算學啓蒙 羊山紀聞 砂石集 京羽二重 東海記
 詩經抄風 三國語林 名物弁解 文識篇 退私錄
 沈存中筆談 溫故日錄 東抄花名 石林詩話
 江湖風月集 詩人玉屑 四六文章 貞觀式 和字正鑑鈔
 畸人傳 玉海抄 玉系記 養生論 金剛經 萃叢經
 北山抄 世諺回音 吳竹集 三餘抄 東國紀行 保元記
 康富記 怪異弁談 誓教古醉醒集 食物本草
 龍波回音 國史實源 行厨集 神名帳 仇物語
 北条盛衰記 漢語抄 西行談集
 此外詩歌連俳の書目少くはとひとよと之行
 乃建八略一二年

芭蕉公羽能楷口決

或云北枝傳 或云正風傳

格不入て格を出さるるをさく格不入さるる時を
 邪格よきか格不入格を出てけりめて自在を
 得る一 詩歌文集を味ハみて心を向上に
 一路よありひ作を曰海よめらるるす巻一
 十年不易一時流り 他つれ句を彩色の
 小く我つれ句を墨線のおとくす一か、小
 少きてる彩色るるきよもあつて心他つよの
 らりてさひ志をわを第一とす 名人を地を
 よく潤る一う一ふ折よあきてるあやまき前よ
 妙阿あ上多るはよきことあよ面白あわ
 等類依例第一吟味す巻一 古今れ撰集小
 眼んさくらす巻一 我つれ流をそよふ人

鶴れ歩みの百韻をの月其れ日曠野ひさこ
猿蓑炭俵等を襲覽すし一容白を時代く
をすしし 初心の時を白敷を好むし一夫より
密峯を月より大山を越て向ふれ林麓一平野を
面を棄すし一六尺を越むと思ふく將ふ七尺を量
むし一と進ん心言き時を邪路よ入安くし一後
低き時を古人の胸中をささるるありしは
ないついの中より以下れものとあふまらるる俗終
平わとのみねをえさるる故あり 俗漢平和を
めさむとの為ありはくしるきさるるありしを
えいといと見えしものありきさるる之俳諧ハ
万葉の意をまてと貴とあり俗とあり味り
るきさるる唐明すして中禁れ家條より
解るるあり時心のいふしきを辱せし

てふをともあるなり我邦をてふをんれ必
るまて先哲れ作を味らひ一而も兼未るる
さくれうれ 句の密を多柳の小ふもま
るよりぬくししてわく 微風よあやむすも
しるるに附心を薄月夜よむめれ自れ
あやむし 晴る心裏の花をまははぬま
れ月をる親す辱し

一書ふいへるるを正風七部と稱しける
りれありるの其れ日流猿蓑をれりき
雲まらけり鶴のあゆみをくも又を涼川
外辰れ西集るるしるるぬき家くのの
すきりしてその越るきしるるあはれ
愚をれりらくすして身りて守ふ人

杖業此地の形をりて致するなり肥前長門
 大坂長門越後長門信列長門都る南北一長
 き地なるなり廣く島廣く廣田越前廣くといふ
 字これ附する地を皆東西一廣くといふなり
 杖業則東西一廣く一故に曠野と名を題
 するなり
 附て云負弁とわけてみれば彼夫木
 集中上古よりその時代よりなるなり万葉
 古今以下に撰集より見ればなるなり悉くあつては
 又代々の
 集よりなるなり或る止風よ叶ふなり悉くひ
 ろひのりめりて致するなり集れ余なるなり
 と負弁と名を号するなりものなるなり
 一 瓶を右におくなりくく名なるなり此集を

大津に弥碩の篇集る連ハ彼に湖の瓢
 を本として致すなり此号なるなり於集の序
 文に注釈より委し一なるなり略す
 一 杖業と宗なるなり宗と祖冬之切徹なるなり文曰くむむ
 流派の出る処を宗と云ふ杖業と蒼空舟一派の
 隋書を引く故に巻改の一句をりて致すなり
 何流の派何宗といふ等し一杖業の文章
 漢文より委し
 一 炭俵を教るなり教る居孝之切令なるなり
 誨るなりサワクルなるなりニキヒクなるなり祖翁の獨
 言を字居てその候号するなり故に福なるなり
 教るなり於處し一なるなり集れ序文より論す
 一 魚一来者此面し此五義を鑑とすなり心ハ
 北なるなりくくやち多うくむなり万葉集

五美の家より出た

序五十二

